

原子力総合防災訓練視察報告会概要 H17. 11. 10

日 時	平成17年11月10日(木) 13時30分～16時
場 所	柏崎原子力広報センター
参 加 者	ー委員ー 新野・浅賀・石田・伊比(隆)・佐藤・武本・前田・宮崎・渡辺(丈)委員 ・・・・9名 ー事務局ー 広報センター 押見事務局長

◆ 訓練視察感想

- 原発が動いてから 20 年。今までに比べたら濃度の濃い訓練だったが、避難の区域も限られていたので、これが実際だったらどうなのかと感じた。地域の小さなまとまりの中で、一般災害や原子力について真剣に考えていく必要があると改めて感じた。県・市・村はそれなりにやっていると思うが、原子力に関してはどちらかと言えば人災という側面がある。こういうものにどこまで付き合わなければならないのか。東京電力等、進める側はその辺を含めた説明を住民にしていく必要がある。
- 広報センターにて、ヘリコプターとバスでの住民の避難から視察。住民が一番真剣な顔をしていたように受け止めた。広報のあり方、情報伝達のあり方をもっと考えるべき。情報伝達を行政にすべて任せるのも大変なこと。住民対応の件に関して、地域の会として発言できる場があったらと感じた。
- 単なる傍観者としての参加は非常に残念。天候の悪化でシナリオの変更をせざるを得なかった事はある意味よかった。市役所の訓練を見て、少し、なまぬるさを感じた。が、訓練視察に参加したことは有意義であった。原子力発電所に近いところほど、危機感を持っているように感じた。遠い、近いに関係なくそれぞれの機関において、きちんとした対応を望みたい。
- 各関係機関の機能、連携の仕方としては、一定の評価はできると思うが、防災に対する意識の高揚がはかれたのかという点で疑問。国が中に入ったということで、指示命令の筋が難しいものを感じた。視察中も、どこでどんな状態にまでいっているのかというのが、わかりにくい。対策本部の情報が各現場にきちんと伝わっているのか。その辺のもどかしさを現場がどう感じていたのか。100%の内容を広報してくれればいいが、「こういう事象が起きた」ということだけが一気に報道されると、住民のパニックが起きるのではないかと感じた。
- JCO 事故以来、防災に関して国がやることとなった。これが失敗だったのかなと感じた。中央の取り決めに時間がかかりがちで、実際問題、地元の指揮がとれるのか心配。が、住民参加の訓練ができるまでにこぎつけたことはよかったのではないかと感じた。防災は地方自治体が一番の重要なポイント。まだ、避難に向けての地域組織、市・村との連携が必要。それがきちんとできることで、すごくいい防災対策になると思う。

- 市民プラザでの防災の講演を聞いた。JCO 事故の際、退避中の施設から、クーラーをつけていいかどうかという電話をもらったという話があって、避難できる施設をつくるのが大切なのではないかと感じた。
放射線が放出されたという連絡はない状態で避難したのだから、スクリーニングの必要はなかったわけで、するならそれなりの説明が必要。
避難住民の列の中には子供もいた。子供も大人の後ろについて、来た順に並んでいたが、事故の度合いや子供等の分けをする必要があるのでは。
除染はクリームのような飛び散らないものでやっていた。なるほどと感じた。
- 市役所の災害対策本部の実際の対応を、何度も見ているので、対応に関しては心配していない。実際の災害時の市役所の力はすごいものがある。が、原子力災害に対する共通認識の土台がないところが少し心配。国のウェブサイトと市の対策本部との意見の相違があったとき、大変なのではという感じを持った。
助ける立場の人の意識の問題をどう上げるかというのが一番大切なのでは。今回は報道に情報が全くといっていいほど、流れてこなかった。聞きに行ったが市民に対して心配させてはいけないということだった。多少、訓練のための訓練になっていないかと感じた。地域の会のような中立の立場のところ、問題点を指摘する必要があるのでは。
- 今回、やはり FM ピッカラは情報の元だと感じた。地域単位で、原子力に関して考えていく必要がある。今回、各地域の長がその地区を守るんだという意識で参加しているか疑問。行政はそれなりにこの訓練を実践したが、一番大事な住民を預かっている地域の人たちが、どの程度参加したか心配。各地域の担当者は、避難区域以外の地域でも参加してもらったほうがいいと感じた。また、地域の会として視察した自分たちが、この訓練を地域に反映させていく必要があると感じた。
- 今回、細かい避難区域の地図を出しているが、そこから外れた人たちがそれで納得いくかなという気持ちを持った。避難区域周辺の人たちはどうするんだという質問も出ていた。
あまりに細かく切ってしまうと風向きなんかも変わるわけで、そういった状況を考えると、これでいいのかと思ってしまう。せめて 6 時間後くらいの経過を見込んだような幅広いところで区切る必要はないのか。
- 放射能が出ないのであれば、避難の範囲もアウトラインでいいのではないかと。
広報のやり方の中で、何キロ区域といってもよくわからないわけで、住民にわかりやすい町内等で区切った避難区域の広報をするべき。区域自体も余裕をもった範囲にすべきで、そのことを住民も認識している必要がある。事前のこういった広報も大切。
10 条と 15 条の違いがはっきり書いてないので、わからない。
- 東京とのテレビ会議は、市の対策本部でも見る事はできるはず。が、2 日目はモニターが切っていた。モニターはつけておくべきではないのか。
それから、市において、オフサイトセンターとのモニター映像を繋げるべきだと思う。
- ブラインド訓練と言っていたが、本当にブラインド訓練だったようだ。プレス情報は、地元で作成した案件を国にあげて許可をもらい、それを自治体にかけて、やっと発表できるとのこと。情報一

つ発表するのにも、かなり時間がかかると感じた。

- 夏と冬など季節の違いとか、また平日や休日で、防災のシナリオは違うのか。実際に違うシナリオがあるのか。
- 今回のまずかったところを、やはり行政は反省材料として、生かしてほしい。
- 強制的ではないということだったが、避難住民は住民台帳カードを持っていた。防災として個人個人が備えておいたほうが良いと思う。移動式体表面測定車を県は備えているのか。もしないようなら是非備えてもらいたい。
参加機関等、参加している人たちだけが慌ただしくしていて、参加していない住民は皆、無関心で取り残されているように思う。訓練を重ねていく必要性を感じ、地域の会の自分たちも、今以上に関心を持って考えていく責任を痛切に感じた。
- 訓練の中で、市民からの問い合わせの電話が殺到するというような場面はなかった。実際の時はかなりの数の問い合わせが予想されるが、あの対策本部で一体どのような対応ができるのか知りたかった。
- 実際に放送が入ってから家から出てきて避難したのではなく、その前に準備しての訓練だったわけで、本当に車椅子を使用している人が訓練に参加しているわけでもなかった。バスに乗り遅れた人とかどうするのかという問題はある。
屋内退避できるコンクリート建屋の数は足りない。歩けば延々1時間ほど歩かなければならないところもあるはず。寝たきりの人はどうするんだという感じがした。
- 市で予測していたことと実際に、どれくらいの違いがあるのか検証していく必要がある。
- 記者発表等、隣接の総合庁舎で行っていたが、防災センターのロビー等で行ったほうがよいのでは。また、悪天候で、東京からヘリを使わず新幹線移動となったが、到着が大幅に遅れた（4時ごろが、6時ごろになると聞いた。）最初から、想定していれば、5時には、着けたのではと思う。

◆ 訓練参加感想

- のんびりしたムードで、避難住民に緊張感がなかったように思う。
三島体育館へバスで避難したのだが、高速道路を使用し、遠回りをして行ったことに何か理由があったのか。このことについて、地元自治体に問い合わせたが、県と協議してやったとのこと。結果的には県が決定したらしい。国道116号線を行ったほうが近いはずなのだが、遠回りをしたのは何故か。
避難先の体育館では、かなり大勢の人が並んだ。スクリーニングと医師の診断に、かなり時間がかかった。実際の時は、もっと大勢の人が来るわけで、順番待ちもかなりの時間がかかることが予想される。大変なことだと感じた。
スクリーニングと問診は丁寧にやってもらった。この点については大変よかった。

- 町内巡回して、広報車での事故情報広報と、防災無線での避難広報が同時であった。
町内に自主防災組織が設置してあるところは、行政の担当が点呼を取りバスに乗せるのではなく、町内の自主防災会で参加者の確認をし、行政に引き継ぐ方法が良かった。
(住民側はお客さんになっていた。)